熊本大学教育実践研究　第33号，151－156，2016

屋外壁画制作の研究
― 台湾での制作 ―

松　永　拓　己*

A Study on Outdoor Mural Painting Work
― Work in Taiwan ―

Takumi MATSUNAGA

1　はじめに

本研究では，様々な屋外壁画を制作することで制作方法，地域貢献の在り方，影響等を研究実践するものである．旧産業文化会館での壁画制作や，附属病院での屋内壁画制作[1)]，阿蘇内牧における壁画制作での実践研究[2)]を踏まえ，絵画制作方法，実践的展開の在り方を図る．

今回は海外の台湾・南栄科技大学において共同制作での壁画制作を実践する．

2　壁画制作

2－1制作計画

平成26年，台湾の南栄科技大学より依頼を受け，大学の壁面に壁画を描くこととなった．

壁画制作はこれまでの研究に則り共同制作で行い，ほぼ壁画制作未経験の台湾の学生と共に短期間で制作を行うこととした．

南栄科技大学からの要望内容は，日本文化を象徴するものであって，描画壁面は応用日本語学科のある外語大楼１楼外壁であり，タイル地の上に短期間で描くことを依頼された．また，学生と共に制作を行い，壁画制作の手法や面白さを伝えることも本実践の課題ともなる．

原画案制作を予め行い，南栄科技大学との意見交換を経て，平成26年７月に原画を作成した．

原画の内容は，中央にお茶を差し出す和服を着た女性を配置し，その周りを富士山と日本の四季を織り交ぜた見る人の視線を回転させる構図とした．春は桜，夏は入道雲，秋は紅葉，冬は雪の風景とし，間に，東京の高層ビル街と，自動車を配置し，日本の現代建築と，産業を象徴させた．女性の背後には，障子を配し平面性と人物を浮き立たせる白の扱いを凝らし，色の変化を中央で受け止め，春色，夏色，秋色，冬色を四方に配する放射状の構成とした．柔らかさのある曲線と硬直した直線の構成と色彩の変化を画面内に共存させ，目に飽きが来ないように遠近感覚を交差させた絵柄とした．

壁面の大きさはおよそ縦3.2m×横９mである．

本制作は平成26年10月27日㈪～10月31日㈮となる．

2－2実制作

平成26年10月26日㈰南栄科技大学入り．絵具，筆，養生シート等の購入．壁面確認．

10月27日㈪制作現場で参加学生10名と挨拶．日程，制作についての説明を行う．以降，31日までの制作過程を述べる．

まず，壁面の清掃及び壁面外周の養生シート張りを行う．次に，下地材シーラーを塗布する．

図１　制作前の壁面

＊ 熊本大学教育学部美術科

図２　壁面清掃

図３　養生シート張り

図４　シーラー塗布

次に，シーラーが乾くまで，筆の制作を行う．購入した筆を解体し，さらに細い筆を作成した．細かい制作作業のために適する大きさと長さの筆とした．

図５　筆作り

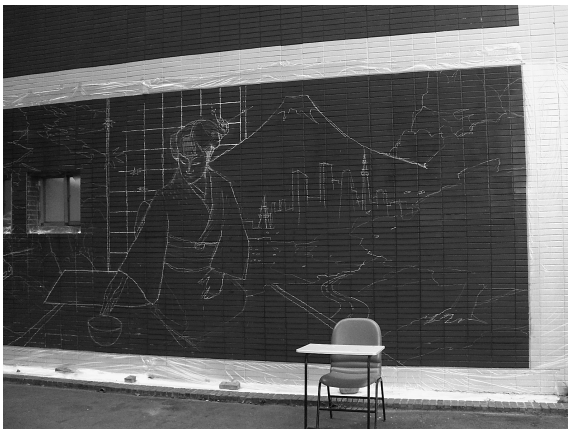

図６　下絵

壁面が乾燥した後，原画に基づき，松永が下絵を描いた．下絵は白チョークで描いており描写中に消えるため，黒の線引きで下絵を起こしていく作業を学生達が行った．

図７　下絵起こし

次に，原画に基づき，着彩を開始する．原画の色に近い色づくりの行い方を指導する．筆使いと，適切な絵の具の扱い方，分量，溶き具合を教え，学生達は各部分ごとに分かれ，各部分での彩色の行い方を指導する．

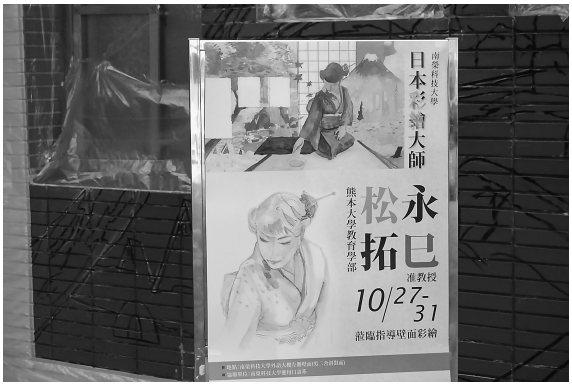

図８　原画ポスター

原画はポスターとして色刷り印刷されており，この原画印刷物を基に色付けを行う．

図９　下描きの様子

図10　背景障子部分制作

基本的に絵の具が垂れてしまう問題から上部から着彩する方が適切であるが，足場が無いため，机，椅子，脚立を使っての高い位置の制作となり，数量に限りがある為，下部と同時進行で行う．

図11　雲の制作

雲の表現では，量感が大切である為，陰影の塗り方を確認しながら白を基調として塗り込む．障子の白と雲の白さの区別を指導する．

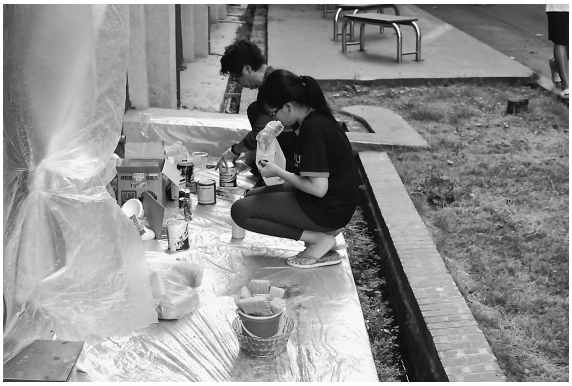

図12　絵の具混色

色味の微妙な調色を行う．２，３色を加減を工夫しながら混ぜ，良い色を確認する．シンナーを使うため溶き加減と変色の具合に注意し，臭気に気を付けた作業となる．

図13　色の塗り重ね

画面上で微妙な調色をする．言葉ではうまく伝わらない部分は実際に描きながら表現手法を見せ伝える．

筆に乗せる絵の具の量，硬さで画面上の混ぜ加減が異なるため，垂れ無いように，薄くなり過ぎないように，筆加減を教える．

図14　雲の表現指導

屋外での壁画制作は見学を自由にしている．制作風景も含めて描いている様子を楽しんで見てもらう．

図15　制作見学者

緑の表現では，様々な色味の緑を作り出すことや，筆使いで葉っぱの雰囲気の変化をつけることを指導する．

図16　緑の表現指導

背景部分を先に完成させ，最後に中心人物を描く手順とした．画面全体の実際の印象を見ながら，画面の中心となる人物の色濃度や表現密度を検討した．

図17　背景描写の大枠完成

図18　背景の細部描写

壁面はタイル地であるため，注意しながら塗布しなければ凸凹の奥に絵の具が入らない．各所で修正，補色しながら完成度を高める．

図19　タイル目地塗り

中心人物を最後に描き完成させる．人物と背景の接点を注意し完成度を高める．画面の一体化を図るため背景モチーフを少し人物に重ねる．

養生シートを剥いだ後，塗り残りやはみ出し部分を補色し完成させる．

図20　中心人物描写

図21　シート剥がしと縁部分の仕上げ

10月30日㈭，壁画制作を記念して，南栄科技大学より栄誉教授の授与および，感謝状の贈呈を受けた．

図22，図23　栄誉教授授与・感謝状授与式

南栄科技大学黄校長の壁画制作参加，共同制作を行われた．

図24　黄校長壁画制作参加

10月31日㈮壁画の除幕式が執り行われ，議員，報道記者，台南市台日友好交流協会等の参加を戴いた．

図25　除幕式

除幕式後，関係者に作品説明を行った．解説には，ボードが準備され台湾語での紹介がなされた．

図26　作品説明会

図27　壁画制作紹介ボード

図28　参加学生達

図29　完成

2-3制作結果

制作期間は５日間であったが，最終日は除幕式も準備され実制作は４日間であった．海外での制作ということで現地での絵の具，筆等の準備が必要となった．

建物外壁用油性塗料は海外製であったが違和感なく，また，筆も安価で揃え易かった．

海外での制作は言語の違いの問題もあるが，日本語が分かる学生達が参加しており，また，制作は言語外で伝わるものであるので，よく指導にかなう制作を実施してくれた．制作における技術指導，手法など，理解してくれており，短期間での制作として納得のいく共同作品が完成した．

制作途中の見学者も多く，完成作品だけではなく制作の様子も観覧していただき交流することで意義深い活動となった．

天候にも恵まれ，好天が続いたが，慣れない海外での制作であり，制作時間が限られていたが，学生達に制作箇所と方法を細かく指示し，よく活躍してくれていた．

絵の内容は，日本文化，風土を象徴したものであり，依頼内容にかなう作品に仕上がっている．

絵画制作を通じて国際交流が出来，喜ばれる国際貢献を行え，親善を深め，学生達の教育にも貢献することが出来たものであった．

台湾の学生にとっては壁画制作の技術・手法，日本語力の応用，制作の達成感を感じ育むことが出来る台日の文化交流の場となった．

絵を描くことは国を超えて海外でも共通であり，制作手法を工夫し整えれば実践できる．共通の達成感を齎すことは，今回の実践成果である．

3　おわりに

海外での壁画共同制作の依頼が松永にあり，これまで行ってきた，日本国内での制作とは環境，状況が異なり私にとって初の事業である．しかし，多くの関係者の方々に支えられながら日本国内で行ってきた制作を踏襲して完成に導けた．

制作に参加した学生達の達成感は，除幕式典後の喜ぶ様子で伝わった．長く壁面を飾る壁画であるため，学生達にとっても意義深いモニュメントとなり，学校との一体感意識もより高いものとなることであると思う．よりよい学校生活を送ることに繋がればこの事業も意義が高まるものと思われる．

制作に参加した学生達以外にも，大学構内での一つの日本文化の象徴としての壁画であるため，広く台湾の方々に伝わるメッセージがあることにも意義深さを感じる．

謝　辞

本壁画制作にご協力下さいました南栄科技大学の教職員の方々及び学生の皆さんに心より感謝申し上げます．

注

1）松永拓己（2011）「共同作業による絵画制作の実践１」『熊本大学教育実践研究第28号』．121-130

2）松永拓己（2014）「屋外壁画制作による地域貢献―阿蘇内牧にて―」『熊本大学教育学部紀要第63号』．249-256